

第三章 震災第三日 地元避難民への救援活動

栄一の四男秀雄は地震発生るとき軽井沢へ出張していた。彼はのちに画家・文筆家としてむしろ知られるが、当時は父親を創立者とする田園都市株式会社で取締役を務めていた。一九二〇年には首都圏での住宅地開発に資するため、欧米十一カ国をも視察した。地震による交通遮断のさなか、彼は翌二日の夕刻ようやく飛鳥山の洪沢邸に辿り着いた。

洪沢秀雄「思い出」

私は軽井沢での地震にあった。翌日、汽車不通の川口駅から歩いて、夕方父の家へたどりついた。両親も兄も姉もみな無事だった。私の子供二人も居合わせだし、当時品川にあった私の家に残っている小さいほうの二人も、母の心づかいで見とどけてあった。

その夜の騒ぎは大変であった。都心から焼けだされてきた群衆の流れが、家の前の道路にひきも切らない。その本流から弾き出されような一群が、門前の芝生をうずめ尽くして、当てのない野営をつづけていた。

「迷子の迷子の三太郎やーい。」あれに似た哀れっぽい真剣な呼び声が、真つ暗な中に尾を引きかわす。いろいろ物騒な噂が飛んでいたため、父の運転手はピストルを手にして夜通し邸内の警戒に当たった。不気味

な余震は一向やまない。庭の広い芝生にトタン屋根の丸太小屋が急造され、中に寝具が用意された。両親も一族もそこに寝た。門前から不安な騒音がひびいてくる。しかし父は私の隣で大きなイビキをかきはじめたのに、私は目がさえて眠れない。なるほど大きな仕事をやる人は、無駄な神経を使わないものだ。……

その翌日父は玄關の前へ椅子を出して腰かけ、両手をステッキの上に重ねながら、大勢の人たちにいる指図していた。私は兄の武之助とこんな相談をした。焼け出されてヤケになった暴民が、過激な社会主義者に扇動されたあげく、裕福そうな家へあばれこまないとは限らない。老体の父に怪我でもあっては大変だ。しばらく父に郷里へ帰ってもらい、東京が安定してから復興に尽くしてもらおう。……兄がそんな主意を述べると、父はみなまで聞かずに

「馬鹿なことを！考えてもわかりそうなものじゃないか。ワシのような老人はこんな時にいささかなりとも働いてこそ、生きてる申訳が立つようなものだ。それを田舎へゆけなどと、卑怯千万な……」

父がなおも言葉をつづけると、父は激しい語気で、

「もうよしなきい。これしきのことを恐れて、八十年も生きてこられたと思うのか？あまりと申せば意気地がない。そんなことでは物の役に立ちませんぞ！」

それから三日目に、父はもう市内を飛びまわっていた。①

大地震の翌朝地元の人から懇望された被災者への支援は、まさしく震災第三日から本格的に着手された。「九月三日」と秘書白石喜太郎は記録する。「滝野川町附近住民並ニ罹災避難民ニ対シ飯米支給ニ付、今村正一・有馬政雄両氏ヨリ申出アリ、今村氏ハ買出ヲ負担シ、有馬氏ハ配給ヲ掌ルコト、ナリ、今村氏ハ渋沢子爵ヨリ武州銀行柴田愛蔵氏ニ宛タル紹介携帯、熊谷・浦和方面ニ向ケ出発」① 滝野川町の住民とそこへの避難者に迅速な庇護が自主的に遂行されたことは、同町による史料にも記録される。

「救護と配給」(滝野川町町誌)

震災直後、焦眉の急務は避難者中の傷病者を救護することである。吾が滝野川町では幸にも、古河男爵家の好意により、同邸内に滝野川町救療所を設け、医師七人、看護婦七人、救護事務員五名を配置して罹災民の救療に従事せしめたが、その施療を受けた者は一千九百九名の多きに達した。

一方、避難者のために一躍倍加した民衆に片時も欠くべからざるものは、食糧品であるのに、忽ちして欠乏払底となり、之れが調達と配給とは、当局者の非常な苦心であったが、是亦、幸にも渋沢子爵の多大なる配慮により、郷里埼玉県より玄米の供給を得る事となり、同邸を滝野川町食糧品配給本部に宛て、全町に組織せられた公共団体並に自警団約三十団体と聯絡して、一糸乱れざる統制の下に、機敏なる配給事務が行はれた。榎本町長、有馬助役、野木収入役を初め、役場吏員の寝食を忘れて、努力奔走せると、前記各町内

① 「白石喜太郎手記」大正一二年九月三日。『渋沢栄一伝記資料』第四八巻、三八一頁。

団体の人々が、救護、配給に従事した延人員は実に二万一千三百六十五人に達した。①

以後長期にわたる渋沢の救援活動が、なによりも食糧の確保よりから開始されたことをここでは注目したい。非常事態における知人からの懇請と彼の迅速な対応には、五年前になされた米騒動への危機管理が素地として認められる。米価高騰に抵抗する米騒動は、一九一八年九月富山県魚津から発し、名古屋や兵庫での拡大とともに、首都圏での抗議集会や示威活動へと発展する。穀類の商店と問屋が糾弾されただけでなく、東京では流通機構の要所たる米穀取引所も怒りの標的とされた。膨大な『渋沢栄一伝記資料』には、都心部での様相と鎮静に向けた渋沢の尽力を報道する新聞も集録される。

一九一八年東京の米騒動(『中外商業新報』)

八月十三日の状況

日比谷公園から蠣殻町、深川佐賀町へ嵐の如く

米価暴騰に対する国民窮迫の叫びが関西方面の暴動となり、日に夜を継いで血腥い事件が勃発しつ、あるが、東京方面は丁度颱風襲来を控へた時のやうな、薄気味の悪い静寂を保つて居た。

① 大島貞吉編『滝野川町制二十周年記念滝野川町誌』(昭和八年六月)、一三一頁。『渋沢栄一伝記資料』

警視庁でも万一を慮り、其際多数人の会合する様な事を禁止したが十三日夜は日比谷に市民大会をするに触れた者があつたので、同公園は夕刻から納涼を兼ねた弥次馬が音楽堂前の椅子場を占有し、八時頃迄に約五百人許り集まり、書生らしい男が二・三人現れ、米価暴騰に關する慷慨演説をしたが、〔中略〕丁度八時半頃になつて、百五十名許りの警官が手に手に提灯を翳して正門から入り込んで群衆に解散を命じたので、一同は口々不平を零しながら正門から雪崩を打つて出ると、公園前の料理店平野屋がそれ暴民襲来と許りに一斉に電気を消すと、弥次馬は面白半分は白半分は石頭を毀し、之を血祭に数寄屋橋から銀座尾張町へ出で、銀座通りの大木屋呉服店・玉屋眼鏡舗等、大通の左側は殆ど軒並に窓硝子・看板等を破壊しながら、築地から新富町通りに殺到した時には人数約一万八千人、米屋や水菓子屋の店先を荒し、八丁堀では電車に投石して之を止め、何の罪もない乗客を下車せしめたり、子供染みた悪戯をして、茅場町から米穀取引所へ向つた頃には其数約二・三万と註された。

蠣殻町取引所附近最も大葛藤

午後九時頃北島町通りにて警官隊に制せられつ、茅場町方面に前進したる数千の大群は、期せず米穀取引所に向ひ、茅場町交叉点附近は無事通過し、鍍橋を渡りて蠣殻町停留場より左に曲り、米穀取引所方面に押入らんとしたるも、多数の警官が小網町入口を固めて遮り、群衆は鍍橋際より蠣殻町通り一面に潮の如く落ち、二万と註せられたり、群衆の一部は二丁目九番地より蠣殻町交番方面に進まんとしたれども、此処にも警官隊嚴重警戒して突破する術なく、其処此処にて警官と群衆とが関の声を挙げて鞭合ひを演じ、警官中負傷したるもあり、同町一丁目三番地先にて揉合ひを始め、之を制せんとして接近したる正力方面監察は、渦巻の中に巻込まれ後頭部に重傷を負ひ、鮮血淋漓たるを拭ひもやらず群衆の制止に従ふなど、一時殺氣漲りしも、多数の警官繰出し来りしかば群衆は氣勢を挫かれ、前後へ動揺めくのみで遂に一步も目的地帯に入るを得ず、龜島町方面に向ひしは十時半なりき、蠣殻町の米穀仲買店は群衆押寄せたりとの報あるや、何れも街灯を滅し屋内の電灯も点せず、堅く表戸を鎖して附近全く暗黒に化し、所々に巡査の白服の動ける様物々しかりき ①

十四日の状況

午後六時頃より日比谷公園及其附近に蝟集したる群衆は、退散を命ぜられしより帝国ホテル前通りに集り、其数約数千に達するに至り、遂に山下橋より銀座方面に出で、店舗に暴行を為したるものあり

一部の群衆約七百名は芝烏森吾妻屋旅館其他芸妓屋・派出所等に投石したるものあり、愛宕警察署に向ひたるも退散せしめられたり

一方浅草駒形劇場に於ては、米価調節閣臣弾劾政談演説会を開催の予定なりしも、会場使用方を謝絶せられ、開会に至らざりしにより、劇場附近に集りたる三百余の者は一団となりて浅草公園に雪崩込み、漸次増加しつ、上野公園に至り、約三千の集団となりたるも暴行等を為さず、其他市内所在に集合する群衆は往々に述べたるが如き暴行を為すものありしが、十五日午前二時平穩に帰せり

一、浅草区吉原廓内に約千余名の一団ありて、附近民家に投石せるものあり

一、日本橋区箱崎町四丁目三井倉庫附近に約一千の群衆あり、投石する者あり

- 一、約一千の群衆浅草区猿屋町某白米商を襲ひ、転じて同区南元町警察署に來り投石するものあり
- 一、浅草区南千住通・山谷町・浅草町附近に約一千の群衆あり、附近の米店を襲ひ、内約五百名は南千住に移り、二・三米商に対し廉売を強請したる後、大橋方面に退散せり
- 一、白木屋呉服店附近にて各方面より集まれる群衆約四・五団となり江戸橋・四日市町・兜町一帯を練り歩き、沿道八ヶ処にて投石したる者あり
- 一、約四百の群衆中、新富町某自動車店に対し暴行を為したる者あり
- 一、約一千名の集団茅場町方面より築地方面に向ひつゝ、沿道商家に投石せる者あり
- 一、約五・六百の群衆、三越呉服店前より室町巡査派出所に押寄せたり
- 一、神田区今川小路派出所前に於て、約四百の群衆同派出所の硝子戸を破壊し、須田町方面に向ひ、更に銀治町松屋呉服店に押寄せ投石し、硝子戸を破壊せり
- 一、約五・六百の群衆、深川区東町巡査派出所に來り、投石したるものあり ①

この夏例年のごとく洪沢栄一は伊香保への避暑を予定し、出発前の七月四日新聞で「富山県滑川に米価の暴騰から、女一揆の起つた事が掲載されてあるのを読んだ。」その後滞在先で「十四日の朝刊新聞を披見に及ぶと、

① 『中外商業新報』第一一六三三号（大正七年八月一七日） 『洪沢栄一伝記資料』第三〇卷六八四一

六八五頁。

早や東京にも騒動の起つた事が掲載されてある。」解決すべき根本問題もあろうが、「応急措置としては寄付金でも募り、目前の危機を緩和するため、同日午後幸い帰京する人のあるのに托し、中野武宮及び藤山雷太の両氏へ長文の手書を送」つた。彼自身も急遽十六日早朝伊香保を去り、同日午後兜町事務所中で中野・藤山両氏と協議したのである。①

米騒動 臨時救済会成る（東京日日新聞 大正七年八月一七日）

洪沢男を会長として帝都の実業家を網羅し、細民の窮状を救ふべく一昨日商業会議所に会合

洪沢男を筆頭に、中野武宮・藤山雷太氏等の東京商業会議所が發起人となり、井上府知事・田尻市長等顧問の下なる東京臨時救済会の創立第一回総会は、一昨午後三時より東京商業会議所内会議室で開かれた前記諸氏の外、近藤廉平男・塩沢博士・早川千吉郎・団琢磨・福井菊三郎・堀越喜重郎・岩崎清七氏等実業家約一百名集合し、中野武宮氏座長席に着き、藤山会頭は先づ趣旨を述べて後『今洪沢男は伊香保に避暑されて居るが、此の会が開かれると聞いて中野さんと私に宛てて、「此の際廉売市場を設立して広く窮民を助けられたい、其の費用は吾々実業家を始め一般富豪で寄附して貰ひたい、尚其の救済方法は井上府知事や田尻市長に一任されたし」と来状がありました』と説明をなし、続いて井上府知事は「昨年の風水害以来、再びに

① 洪沢栄一「米価暴騰善後策」『龍門雜誌』第三六八号（大正八年一月）『洪沢栄一伝記資料』第三〇卷六九一

一六九二頁。

お願に出ねばならぬのは慚愧に堪へない次第であります、今の場合東京府では内地米の節約を図るために外米の押売りして居り、朝鮮米は本日（十五日）農商務省に迫つて一升卅銭に売る事にしました、上流実業家諸氏にも大に外米使用を奨励せられんことを切望いたします」と述べ、田尻市長は『日本米は深川になくとも日本には吾々の食べるに充分な程あることが知れた、外米も安く売りますが日本米も安値で需要に応ずることに市では決して居る、市には少しは残つた金がある、今は寄附を待たずしてそれで間に合はす積り、それがなくなつたら寄附金でお願いする』といふ、次で近藤廉平男より本会の会長に洪沢男を、副会長に中野武宮・藤山雷太を推すことに提議して可決し、事務所は東京商業会議所に置くことにした。①

米騒動に際した窮民対策にも似通う震災時の救援活動について、東京府編纂の『大正震災美積』でも洪沢による食糧確保が高く評価される。ここではでは当局へ向けた応急の提言や経費の負担だけでなく、広大な邸宅と庭園を挙げて被災民に供したことが具体的に描写された。大地震の翌年刊行されたこの書物には、人命救助、火災防止、罹災者救護、等々二百以上の挿話が集録されるなかで、滝野川町における富豪の功績を伝えるのは、つぎの項目である。

① 『東京日日新聞』第一五〇二七号（大正七年八月一七日）『洪沢栄一伝記資料』第三〇巻六九一頁―

六九二頁。

「篤志家が多くて幸福な町」 その一

九月二日の夜は已に十七八万の避難者が比較的安全な飛鳥山公園を控えた此の滝野川町に流れ込んでいた。東京方面の火災は尚鎮まらぬ。身を安きに置かんとして逃れ来る群衆は一隊又一隊、続々として其の尽くるところを知らない。事態の不安は刻々に其の度を加えるばかりであった。

町長は助役と共に洪沢子爵をその邸に見舞つた。流石に経済界の覇者である。「最も緊急なる問題は食糧の提供である。直ちに米を購入しなければならぬ。」と形勢を洞察した子爵は、先ず町長に注意を与えられた。今度の震災に因つて蒙つた子爵の損害は決して鮮少なものはなかつた。それにも拘わらず郷里埼玉県から米の買入れを直ちに開始せられた子爵自身の信用を以てせられたのである。子爵の購入せられた米は前後凡そ三四千俵に上る。之れをすべて一升五十銭を以つて売り下げた。一升五十銭の価は決して安くはないけれども平生と大いに趣を異にしているのだ。鉄橋破損のために汽車は川口駅までしか荷を運ばない。川口駅から滝野川までは荷馬車やトラックで持つて来なければならぬ。時には一台数十円を払つて浦和まで取りに行ったこともある。一升の価は五十銭位の事ではない。売つたのではあるが子爵の損害は事実莫大であったのである。店に売れる米もなく、家に食ふべき飯の無かつた際に此の米が幾万の人々を飢餓から救つた事であろう。内務省の手になる配給米は十二日朝から此の町をも潤すことになつたのですなわち此のことは中止するに至つた。

子爵は特に今回だけ世を救つたのではない。常に公共の為を卒先して活動されることは世間周知のことである。本邸を置く番町のために平素あらゆる便宜と援助とを与へられていることは今更喋々を要しない。同

邸は殆ど全部開放せられて当町の糧食本部を置かれた。玄關から応接室、客間に至るまでさしも宏壮なる建物も今は味噌、醤油、米、薯、野菜、缶詰の類が山と積まれて余す所がない。床は泥にまみれ、窓は埃によれて目もあてられぬ。助役を初めとして吏員等が其の間に汗みどろになったやうなものである。子爵は些かの不快げな顔色も見せられぬ。帰邸される毎に必ず吏員の労をねぎらはれる。どんなに遅い時でも言葉掛けて配給の状況を聞き取られる。全然吾が事のやうに見て居られるのだ。自分の為にするらしい点は微塵もないのであった。

場所柄だけに当町に於ける鮮人騒ぎは実に凄まじい様相で何時如何なる惨劇をも惹き起さぬとも限らない形勢であった。町長助役等は百万其の静鎮に力めたが殆ど何程の効もなかった。子爵は深く此の事を憂へ四日の事であつたらう、二回も自動車を飛ばして後藤内務大臣に面会し、之を如何にすべきかと伺出られたのである。「鮮人は決して怖るるにたりない。けれども今は非常の際である。何処といえども嚴重にみずから警めなければならぬ。」内務大臣の回答をもたらし子爵は各自自衛団に対して大義を誤らざるやう注意する所があつた。当町内に一の忌まわしき殺傷事件も見なかつたのは一に子爵の斡旋によるものと云ふべきである。

九月も半ば過ぎた頃急に寒冷を催してバラックに住む避難者たちは夜寒に少なからず脅かされた。子爵の同情は愈々微に入り細に亘る。一夜の中には四百枚の蒲団を買入れて寄付された。收容所の冷たき床に呻いて居た病者、傷者、着る物も無く慄えてゐた避難者等が厚い恵みに温められたのであった。①

やはり滝野川町に住む富豪古河虎之助の自主的な救援もこの項目では称讃される。渋沢と同じく飛鳥山西ヶ原に彼が広大な邸宅と庭園を竣工させたのは、大地震の四年前であつた。建築家ジョサイア・コンドルの設計による西洋館は両脇に切妻屋根を擁し、地上二階と地下一階に大食堂、ビリヤード室、喫茶室をも備えた。台地を美事に活かした広大な敷地には、バラやツツジを主体とする西洋庭園とともに、心字池を中心に回廊式日本庭園も築かれていた。西ヶ原における豪壮な古河邸の造営には、遠からぬ渋沢邸、暖ぬく依よ村むら荘の深い影響が認められる。虎之助はその敷地に被災者数千名を受け入れるとともに、施療所を設置して傷病者の治療を援護した。

「篤志家が多くて幸福な町」 その二

渋沢子爵と同様に其の徳を称へなかなければならないのは古河男爵である。男爵邸は震災と共に開放せられて二日の夜は已に三千名位の避難者が收容されていた。その二日の晩男爵は自ら役場に來られて町長に向ひ、「病人や怪我人の救護に就て何等かの方法が講ぜられたか。若し必要とならば我が邸宅を開放して提供するも差支えない。」と申出でられた。何たる福音であらう。壮麗を極めたる男爵邸西洋館の階下全部は忽ちにして開放せられた。真の同情に発した善行は何等求むる事をしない。男爵は徒らに名を売らんとしたのでは

ない。「滝野川町救療所」と名づけて直ちに傷病者の救護を開始した。

邸宅を与えたのみならば他にも例はあらう。何も建築の宏麗なるを誇らんとするのではない。男爵は更に進んで自ら救護の第一線に立ったのであった。先ず藥品其の他の購入に奔走された。言う迄もなく当時は藥品の欠乏甚しく、其の蒐集は思いの外に困難であった。遠くは足尾銅山まで人を派して求めしめた。男爵の買入れた藥品はすべて二万円の多きに上ったのである。藥品の完備したる点に於いて他の如何なる救療所にも遜色なかった。順天堂の外科主任たりし押川公介君を初め、杉本東造、野本正直、本田ドクトル等に依頼して救護の任に当らしめ、男爵自身はシャツ一枚の軽装で、恰も小使の如く、或いは患者医員の間に立ち、或いは役場との間を往復して席の温まる暇もなく縦横に奔走せられた。壮健にも見受けられぬ男爵夫人もエブロン姿甲斐甲斐しく、看護婦や女中の先頭に立って患者の手当、食事の用意、さては清潔整頓の仕事まで、露厭ふ気色もなく働き続けられた。男爵夫妻の目覚ましき活動に感激して玄閑子を勤めたのは曾て江東の土俵に其の名を得た大錦君であった。彼は男爵邸に収容された避難者の一人であったのである。

救療の一例を示せば他は十分に想像し得られるであろう。患部へ薬を塗るのに一回二十円位を要する負傷者が多かった。時には一日四十人位もこんな患者を収容手当に加えたことがある。しかも一日二回塗替えてやるのであった。前後収容した患者は延べて二十人に及んでゐる。尚ほ同邸には歩兵第三十聯隊の本部が置かれたため、階上の全部が之に提供せられてゐたのであった。

後内務省から七百石の木材を供給せられて二十三棟のバラックを同邸内に建設することになった。男爵は其の費用を全部自身で負担したにも拘わらず、毫も其の名義を用いない。しかも収容された人々に対しては親切を極めてゐる。外に出て働く人の便宜にと託児所様の設けもした。保母三名を雇入れ男爵夫人が肝煎じ

しつつ毎日多くの子供を預つてゐる。一日多きは五六十名に達すると云ふ。

古河男爵邸内の救療所へ瀕死の病人を連れ来つて之を再生への光明に導き出されたのは篤志家小林博士であった。博士は本年四十歳、一昨年来国から帰朝され、今年博士の栄冠を得られた軌道の大家である。現に滝野川町会議員で王子脳病院長をしている。震災前は三百人からの患者を病院に預つて、自分の病院の医員を一二伴つた博士は、到る所の罹災者収容所に現れた。病人と云わず、怪我人と云わず片っ端から手当を加え、薬を与えて廻つた。重態の者と見れば直ぐ様古河邸の救療所へ連れて行つた。実際同町救療所で取扱つた重患者の殆どすべては博士が拾ひ集めて来たものと云うことが出来るのであった。救療所に来ると押川君と協力して収容患者の手当をする。十月の半ば頃まで目まぐるしい迄に活躍奮闘せられたのであった。①

古河財閥の創業者古河市兵衛はかつて小野組の総支配人であり、第一国立銀行創立の協力者であり、足尾銅山の開発で知られる。大鉱脈の発見で日本最大の銅生産量に達した古河鉱業は、一八八三年渡良瀬川流域の鉱毒事件をも惹き起し、日本最初の公害問題として世の批判を浴びた。こうした産業被害と抗議運動が進むなかで、一九〇三年市兵衛は逝去する。やがて社長に就任した古河虎之助は、謝罪の気持を籠めて東北帝国大学および九州帝国大学の校舎建設に多額の寄付を行った。こうしたとき財閥の社会奉仕を仲介したのは、当時の内務大臣原敬とされる。震災時における古河家の救援活動にも公害惹起への陳謝が含まれるであろう。

小野組に第一国立銀行創立への協力を求めて以来、渋沢栄一は終生古河市兵衛と親密な間柄にあった。足尾銅山の開発にも出資するが、志賀直道について一八八八年その企業から離脱した。しかし、古河家と渋沢家の交誼は以後も維持され、市兵衛の実子虎之助と西郷従道の子女不二子との結婚には栄一が媒酌人を務める。明治末期帝国ホテルでなされたその披露宴は、政界・財界の要人や陸海軍の重鎮など豪華な賓客の顔触れが私たちを驚かせる。

古川家の結婚披露 (『中外商業新報』明治四一年二月六日)

小春日和の空朗にして、吹く風も左迄に寒からぬ五日の午後一時より、帝国ホテルの有様は芽出度くも亦賑はしく、古川家結婚披露会は此処に開かれたり、玄閣には新夫婦を初め、木村長七・中島久万吉・岡崎邦輔・中田敬義・近藤陸三郎・井上公二諸氏其他主なる店員居並びて、雲の如く来集する来賓を迎接し、中島男は一々新夫婦を紹介して一同を会場に導びきぬ、場に充てたる一室には茶菓・寿司・団子等の設備あり、新橋の紅裙こうくわ此間を斡旋したり、やがて奏楽の音に伴れて余興の幕を開き、新橋芸妓連の、新曲多摩川に続き高崎正風男の作なる挿廻菊に折柄の祝意を込め小鼓の音も冴えて、舞の手振りの面白かりしに、一同頗る興に入り、尚ほ川上貞奴の喜劇玉手箱、新橋若手紅裙連の弥生空を演じたり、ここに渋沢男は起て新夫婦を来賓に紹介して一場の挨拶を為せり、四時立食に移り、席上大山公爵の発声にて幾千世変らぬ結婚を祝し、一同歡を尽して自己かじ、散会せしが、古川・西郷両家に縁ある朝野の貴紳貴婦人の来会せしこととて、華麗なる裡に静肅の趣を供え近年稀に見る盛会なりき、当日の主なる来賓如左

大山公 松方侯 山本大将 東郷大将 大浦農相 後藤通相 岡部法相 小松原文相 土方伯 林伯 板垣伯 柳沢伯 末松子 三井男 岩崎男 渋沢男 松尾男 高橋男 石本陸軍次官 若槻大蔵次官 押川農商務次官 松田正久 鶴原定吉 田健次郎 三井八郎次郎 近藤廉平 加藤正義 団琢磨 飯田義一 浅野総一郎 馬越恭平 高田慎蔵 添田寿一 木村清四郎 大谷嘉兵衛 松方蔵 瓜生震 三村君平 牟田口元学 阿部泰蔵 末延道成 佐々木勇之助 雨宮敬次郎 岩永省一 山之内一次 冢師民嘉 北里博士 山田博士 真野博士 杉田定一 野田卯太郎 高崎安彦 服部金太郎 永江純一 算浦勝人 大岡育造 福沢捨次郎 野崎広太 其他夫人令嬢等約五百名 ①

ようやく震災第三日秘書の増田明六は日本橋兜町へ出向き、被災の状況を確認した。海運橋の袂で第一国立銀行が辛うじて偉容を留めながら、株式取引所をはじめ、多数の銀行とともに渋沢事務所も灰燼に帰した。彼の報告によって執務はしばらく飛鳥山の渋沢邸で営まれ、翌週丸の内なる古河合名会社のなかに仮事務所が設置される。

増田明六の日誌

九月三日 月 晴

早朝余燼尚濛々タル中ヲ衝キ兜町ニ至リ、事務処ヲ巡察ス〔中略〕コハソモ如何ニ、明治三十九年四月以來ニ於ケル過半ノ期間ヲ恙ナク其室内ニ暮ラシメシ事務処ハ去一日午後六・七時頃、対岸小舟町ト隣接坂本町トヨリ延焼シ来リシ火災ニ包マレ、救助ノ方法モ無く、憫ムベシ収蔵セル一切ノ書類什器ト共ニ焼失ニ帰シ〔中略〕夫レヨリ飛鳥山邸ニ至リ、子爵ニ面会シテ、罹災ノ状況及金庫ノ無事ナルベキヲ報告シ、当分ノ内、事務所ヲ飛鳥山邸青淵文庫内ニ設置スルコト、シ・・・

九月四日 火 晴

飛鳥山事務処ニ出勤ス

九月九日 日 晴夜降雨

飛鳥山事務処ニ出勤シ、前日金庫ヨリ取出シタル書類物件ヲ自動車ニ搭乘シテ、丸ノ内古河合名会社仮設事務処ニ至ル 右書類物件ハ第一銀行本店倉庫内ニ格納ス、古河合名会社ヨリ卓子椅子等ヲ借用シテ、事務処ヲ形成ス

九月十日

丸ノ内事務処ニ出勤

①

他方隅田川を隔てた深川では、永代橋を隔てた深川では富岡八幡宮の近く門前仲町から出火し、食糧供給の基

① 増田明六「日誌」(増田正純氏所蔵)『洪沢栄一伝記資料』第五七卷、八七三―八七四頁。

点である東京廻米市場が潰滅した。この大火によって周囲に連なる多数の物流企業、すなわち洪沢倉庫、三井倉庫、東京倉庫、安田倉庫、等々も焼尽する。なかでも洪沢倉庫株式会社は洪沢家が直轄する重要な会社であって、全国各地に物流機関が設け、主として米穀など保管および輸送を業務とする。深川福住町にあった洪沢邸の一部を敷地に、栄一を初代社長として一八九七年創立され、株式の大半は洪沢家と第一銀行で二分されていた。大地震の際には、第一銀行頭取の佐々木勇之助が同社の会長を兼務し、栄一の孫洪沢敬三や娘婿の明石照男が取締役に、秘書の増田正純も監査役に列する。『洪沢倉庫株式会社三十年史』から深川震災の記述を引用する。

関東大震災 洪沢倉庫

大正十二年九月一日昼十一時五十八分突如東京及近県に亘り起りたる大地震は実に未曾有の惨状を惹起したり。当倉庫として震災の被害は驚くべき程度に非らざりしも、其夜各所より起りたる火災のため東京市内は山の手方面の一部を除き下町は丸の内一帯を残して全部焼失し、当倉庫に於いても深川の鉄筋コンクリート倉庫平屋建六百三十五坪と外に借庫八十坪を除き深川本店、南茅場町、霊岸島町南出張所四千余坪外に借庫二千余坪共類焼し保管貨物金額約八百万円を烏有に帰せしめたり。他の同業倉庫も住友のコンクリート五階建を除き全部焦土に化したり。取りあえず丸の内大川事務所の一部を借受け九月四日より本店仮事務所を開き各焼跡に其旨揭示す。〔中略〕

筆者(利倉久吉)は初震当日かくの如き大火災を惹起せむとは夢想にも思い起し能はざりし処にして、單に普通警戒の外火災に対する非常準備に思ひ及ばざりしは今更内心慚愧の至りに堪へざる次第にして、かか

る巨火に対し水道は第一に破壊し消防ポンプ類の多くは破損して長時の使用に耐えず、其他如何なる準備も無効に終るべきは必然ながら、尚且最善の注意無からざりしものありしが如く大に遺憾とする処なり。①

なお、これら物流産業が依拠する東京廻米市場は一八八六年栄一の従兄渋沢喜作等の尽力により開設された。同市場の由来と成立については、日本銀行編の調査報告に簡潔で明快な記述が見出される。

深川市場ト其組織

徳川氏江戸ヲ相シテ幕府ヲ開キシ以来江戸市街ノ發達著シク享保年間既ニ諸侯家臣幕府ノ旗本御家人其他市民ヲ加ヘテ在住ノ人口約百五十万を計上セリト云フ、サレハ當時既ニ年四、五百万俵の米ヲ消費シ居タルヤ疑ヲイレス、之方供給ハ関東地廻米ノ外、遠國ノ廻米ヲ以テ充當シタルモノノ如シ、〔中略〕當時供給米ヲ掌ル商人ニハ「御蔵米」ヨ取扱フ「札差」即チ一旦淺草ノ米蔵、本所横網ノ倉庫ヘ納メタル幕府ノ廻米ヲ旗本御家人ヘ給与スルモノ、「遠地廻米」即チ當時「納屋米」ト称スルヲ「下リ米問屋」及ヒ地廻米ヲ取扱フ「脇店」ノ三者アリタリ、〔中略〕明治ニ至リテモ米納ヲ金納ニ改ムル迄ハ尚ホ此組織ヲ存シタリ然ルニ金納以来状況全ク一変シテ各藩ノ御蔵米ヲモ前記特殊機関以外ノ純然タル商人ノ手ニヨリ販買ヒサルヨ

① 利倉久吉著『渋沢倉庫株式会社三十年史』渋沢倉庫株式会社、一九三二年。一五五―一五七、二三五―二三六頁。

得サルニ至リ、多額ノ移出ヲナス米産地ニ於テハ一時非常ニ困難シタリ、殊ニ仙台藩ノ如キハ前述ノ如ク往時ヨリ他藩ト異リ大阪江戸ヘノ廻送ハ藩ノ事業トシテ全部藩ノ手ニヨリテ移出シ、私人ノ米迄モ商人ノ取扱ヲ許ササリシカハ、今此革新ニ遭ヒ地方商人ト東京商人トノ連絡ヲ欠キ一時移出中止ノ姿トナリタリ、当路ノ官人痛クココニ苦心シ渋沢栄一、同喜作ノ両氏ニ謀リタルニ其任ニ当ル事トナリ、全国ノ米ノ荷受方廻送方ヲ引受ケ先ズ仙台米ノ廻送ニ着手シ三菱組ノ汽船ニテ東京ニ廻送シ深川ニオケル各藩ノ蔵所ニ積入レタルカココニ始メテ遠隔ノ地方ト東京間ニ實際ノ商業的取引ヲ開クニ至レリ。

然ルニ一方市中ニ於ケル米取引ハ未タ雜然タルモノアリキ、即チ地廻米ヲ取扱フ脇店ヲ別トシ旧下リ米問屋ノ或ル者及、小野組等小網町川岸ニ於テ營業ヲ繼續シタリシカ當時兜町ニ不用地アリシヲ持テココニ米商ヲ集合シヤヤ市場ノ如キモノヲ作りシモ其効果少カリキ越エテ明治十七年政府ハ東京都知事ニ命シ市中玄米問屋業ノ統一ヲ図ラントシ深川ニ米穀取引所ヲ設ケ一方廻米ノ荷受ト市中販買ヲ營ミタル前記渋沢喜作氏其他三井、久住、奥、中村ノ五氏ニ依頼スルニ米取引整理ノ事ヲ以テス、ココニ於テ五氏ハ今ノ廻米問屋組合ヲ組織シ明治十九年十二月深川佐賀町ニ公開ノ正米市場ヲ設ケ之レヲ東京廻米問屋市場ト称シタルカ爾米米ノ供給ハ此廻米問屋ト神田川、龜島、本所堅川等ノ脇店ノミニテ取扱フコトトナレリ。①

① 日本銀行調査局編『東京深川市場ニ於ケル正米取引ニ関スル調査』日本銀行、一九一九年。十一―十二頁。